

生誕 100 年 朝倉摂展 初の回顧展

絵画、舞台、絵本—知られざる創作の全貌に迫る

練馬区立美術館(中村橋) 22.06.26~08.14



「朝倉摂(せつ)」(1922~2014)は、彫刻家「朝倉文夫」の長女で、親の方針で学校には通わず、独自の家庭教育で育ち17歳で日本画の道に進み、徹底して自然観察する目を養った。そのため、何気ない植物や虫、人物をすくい取った「素描」は見る人を引きつけ、一本芯の通った表現が見られる作家である。

《群像》デッサン 鉛筆、パステル、紙 1950年

本展は、画伯の本格的な大回顧展で、図面や模型などの舞台美術家としての活動に、新聞や絵本の挿絵作品など「日本画約40点」に素描に加え、舞台美術の模型やデザイン画、資料、絵本原画を含む「約200点」が展示されている。

これらの作品は、若き日の日本画の数々、自身が封印しこれまでほとんど紹介されることの無かった作品であるために注目されている。



朝倉摂 《更紗の部屋》 顔料、紙 1942年



朝倉摂 《あび》 顔料、紙 1943年

縦型の画面に芋を取り込むように配された女性たちは、赤色系に統一された様々柄の装いで描かれ、軽やかでモダンな印象を与える21歳の作品。



朝倉摂 《黄衣》 顔料、紙 1948年

絵の具の質感が際立つ、やや沈んだ色合いの女性の表情を描いた作品。